

# 長崎県地方史だより

第70号

題字 小曾根 星 堂 先生

## 坂本龍馬と大村藩士・渡辺昇のぼり (薩長同盟と一繩ひとなわの策)

—「一繩」は倒幕諸藩連合の暗号なり—

稲富 裕和



坂本龍馬と渡辺昇  
幕末の日本を決  
定付けたものとし  
て、慶応二年一月  
に薩摩の西郷隆盛、

長州の桂小五郎が会談して薩長同盟  
を締結し、その書面に坂本龍馬が裏  
書をしたというのが定説であるかの  
ようになっていく。しかしこれには

学界でも異論がある。事実を否定す  
るものではなく、同盟と言うまでに  
は至っていないとするものである。

大村藩士・渡辺昇が残した「自伝」  
からも、そのことを読み取ることが  
できる。

渡辺昇は、「大村勤王三十七士」の  
中心人物の一人で、藩の外交方とし  
て活躍。明治初頭の浦上四番崩れの  
断罪、その後、大阪府知事、会計検  
査院院長などを歴任した。また武術  
家としても名高く、明治になって諸  
流派を統合して近代の剣道が生まれ  
たとき、最高位の「七段」になった  
人物でもある。

渡辺が残した「自伝」を中心に幕  
末の動きを見てみると、薩長を中心  
とした時代の変革者たちの行動が浮

かび上がる。同時に長崎では新たな  
居留地が出来、諸外国人の到来と共  
に、そこから近代的武器などの物資  
調達を行う動き、また西洋を模した  
新しい国家のモデルを学び取ろうと  
する動きなど、来るべき近代を摸索  
しようとする全国各藩並びに俊英た  
ちの活発な動きがある。

ここに天領長崎が日本の近代化に  
果たした役割と重要性が浮かび上  
がってくる。

坂本龍馬も、数多くいる近代化を  
目指した日本の俊英の一人であるこ  
とは間違いなく、長崎と深い関わり  
を持つ大村藩の渡辺も、好むと好ま  
ざるとにかかわらず、その最先端で  
活躍することになる。

本稿では、明治二十一年、会計検  
査院院長として欧米視察旅行の帰  
りに船中で書かれた「渡辺昇自伝」と  
『臺山公事蹟たいざんこうじせき（最後の  
大村藩主の事蹟）』を元に、倒幕へ進む動きを追っ  
てみることにする。

自伝によれば、

慶応二年六月頃 土佐藩士吉井源  
馬大村に渡辺昇を訪ない曰く「足下  
一繩の持論、龍馬の主張と殆ど符節

### 目次

- ・坂本龍馬と大村藩士・渡辺昇（薩長同盟と一繩の策）
  - 「一繩」は倒幕諸藩連合の暗号なり — . . . . . 稲富 裕和 . . . . . 1
- ・長崎と黄檗宗（文化） . . . . . 原田 博二 . . . . . 5
- ・各史談会の年間活動報告 . . . . . 9
- ・事務局より . . . . . 12